しかるに先生は，聴衆の好奇心でもあおるためであったか，わが同胞の裏面まですっぱぬいて，時に嘲弄的な語さえ加えたのであるから，その演説が，紳士の演説として穏当を欠いたことはいうまでもない．しかし，御本人は聴衆の意を迎えたつもりで，始終満面に得意の色を浮かべていた．

ところが，いずくんぞ知らん，この聴衆の中には，当時まだ少壮の森鷗外という熱血男子のいたことをだ．この頃ライプチッヒにいた鷗外は，日本に関する演説と聞いて，わざわざドレスデンまで出かけて行ったのであった．

鷗外は演説が終わるやいなや，直ちにその座席に起立して，ひと声高く，

『絶東国の一男子森林太郎ここにあり．今の演説には誤謬多し．異議を挾む』と叫んだ．

すると視線が一斉に鷗外の方へ向いたのみならず，ナウマン先生の演説ぶりに嫌気をもよおしていた連中は，紳士といわず貴女といわず，皆さかんに拍手して，鷗外に同情を表した．これがために，演説者その人は，その予期に反して，少なからず器量を落とした．」

さて，

「この頃，鷗外はライプチッヒにいた」というのは明白な間違いである．けれども，これは単純な思い違いであって，本質的に重大な間違いではないといってもよい．ところが，その後はひどい．これは間違いではなくて捏造である．そのことは，最初に紹介した鷗外自身の「独逸日記」の記録と比較すれば一目瞭然である．けしからんのはナウマン博士ではなくて，かくもひどく事実を捩じ曲げた横山又次郎教授である．

第一，横山教授はそのとき，まだ日本にいたのであって，もちろん，その講演会には出席していなかった．

いったい，横山教授は何のために，そんなでたらめを書いたのであろうか？　読者の好奇心でもあおるためであったのだろうか？（以下次回）

YAMASHITA Noboru (1992): Visits to relations and surrounding places of Dr. Edmund Naumann II. München.

＜受付：1991年6月18日＞

地学と切手

スピッツベルゲンの炭坑夫

P. Q.

スピッツベルゲンはノルウェーの北方約600kmの北極海にある．公式にはスヴァルバール（Svalbard）と呼ばれる．面積は約62,000km²，北海道の約4分の3倍であるのに，人口は1962年調べでは2,781人で，そのうちロシア人は約2,000人である．世界最北の定住地である．

12世紀にヴァイキングによって発見されたと伝えられるが，ヨーロッパ人に知られるようになったのは16世紀末以降のことである．多くの島からなり，大部分は標高300～600mで，土地の90％は氷河に覆われて，北部には世界最北の新期火山と温泉がある．地下200～300mまで永久凍土で，夏は表面から1mほど融ける．第三紀層の地層中にはカエデなどの植物化石があったり，白亜紀層中に恐竜イグアノドンの足跡化石が発見されたりしているので，当時の温暖な気候が推定される．

1925年42カ国が参加した条約では正式なノルウェー領として認められたが，その際にソビエトも石炭の採掘権を得ることとなった．石炭は西部のロングイールビエン付近に産し，1,400万トンの埋蔵と言われている．ソビエトは年産約40万トン，ノルウェーは約30万トンと言われ，積み出しは夏に限られている．ソビエトは約100億ルーブルを開発に投資したが累積赤字がふくらんで行く．それでも操業を止めるわけにはいかないのは国益がからんでいるからである．事情はノルウェー側も同じで，島の主権を維持するため，7カ所のうち5カ所を閉鎖しながら操業をつづけている．

ほかに亜鉛・石こう・鉄鉱があるが開発されていない．

資源で重要なのは石油である．両国のほかにイギリス・西ドイツ・スウェーデンがノルウェーとの間に探査権契約を結んでいる．ノルウェーは陸上の外に力を入れているのはバレンツ海の海底石油であるがまだ成功していない．

切手は1975年にノルウェー帰属50年を記念して発行された3種のうちで，帰宅する炭鉱夫を表わしている．